

株式会社ロボット 映画監督

小泉徳宏 君

【こいずみ のりひろ】

慶應義塾湘南藤沢中等部・高等部（SFC中高）を経て、2003年法学部政治学科卒業。株式会社ロボット映画部所属。塾生時代に作った自主制作映画が高い評価を受ける。ロボット入社後に映画『タイヨウのうた』『ガチ☆ボーイ』『FLOWERS -フラワーズ-』『カノジョは嘘を愛しすぎて』『ちはやふる 上の句/下の句』を監督。『ちはやふる 上の句』に続き『下の句』も近々DVD発売。他にテレビドラマ、CMの演出も手掛けている。

弱冠25歳で映画『タイヨウのうた』初監督、以降、『ちはやふる』などヒット作が続く映画監督はじめての一步は中学の授業でのCM映像作り

漱石の『こゝろ』を
明治時代の設定で映像化

——『ちはやふる 上の句/下の句』など、ヒット作品を連続して送り出している小泉徳宏監督は、日本映画界を支える若手監督の一人。まずSFC中高時代のことを聞かせてください。

小泉 父の仕事の関係で、小学生の頃はロサンゼルスで暮らしました。中学選びは親任せでしたが、帰国子女がのびのび学べそうだとSFC中高を選んだようです。テニス部に入部して、楽しい日々を送っていました。

思えば、映像制作のきっかけを作ってくれたのは中学3年の授業です。国語の相川涼太郎先生から、「テレビCMを作ってみよう」という課題が出て、どこで用意したのか数台のビデオカメラと編集機が貸し出され、数人のグループで胃腸薬のCM映像を作りました。その後、高1のときにも同じような課題が出て、ドラマ映像を作り、高2では、夏目漱石の『こゝろ』をレポートに書いてまとめるか、映画を撮るかという選択肢のある課題が出て、迷わず映画にしました。グループで力を合わせて、過去作での失敗も活かして丁寧につちりと作りました。時代設

定は現代でもよかったです。室内の調度も明治末期の雰囲気を出して、できる限り原作に忠実に撮りました。苦勞した甲斐があって、先生からいい評価を得られましたし、同級生たちにも好評でした。——そのときに映画監督を志したのですか？

小泉 いえ、そのときはまだそこまで考えませんでした。が、映画作りは面白いなと思っただけは確かです。編集次第で雰囲気が変わる、つける音楽でもがらりと変わることを知りました。プロになっても編集と音楽をつける作業が一番好きです。結果的には、僕は映画を見て感動して監督になったのではなく、実際に映像を作るところからこの世界に入ったと言えます。とは言え、好きな映画はあります。中3のときに、相川先生から岩井俊二監督の『打ち上げ花火、下から見るか？横から見ると？』と『Love Letter』を見せてもらって、そのときにはその映画の本当の価値を理解してなかったのですが、『こゝろ』を作った後に見直すと、その素晴らしさがよくわかりました。——SFCではなく、法学部政治学科に進んだ理由は？

小泉 SFCで映像を学ぶ選択肢もありましたが、6年学んだSFCを離れて遠

うキャンパスで学ぶことで、幅広い見識が身につく、いろいろな人にも出会えると思っただけです。それにまだ映像制作を仕事にしようとは決めていなくて、テレビの構成作家にも興味があり、政治学科はマスコミに強いという定評があったので、それも理由の一つです。

実は子供の頃から人を笑わせるのが大好き。自分でお笑い芸人になりたいという気持ちも、ゼロではありませんでした（笑）、バラエティの台本を書くことに、より興味がありました。だからテレビ業界への就職を視野に入れて、政治学科に進んだのです。



構成作家は将来の仕事のつもりで、映画作りはむしろ趣味としてとらえていたので、映画が作れる環境を期待し、大学に進学



映画を撮影している大学時代の小泉君

してからはシネマ研究会（シネ研）に入りました。ところが当時シネ研は映画を作るというよりは、映画について語るのが主な活動で、ならば自分で作るしかない、映画の台本を書き、バイトをしてビデオカメラを買いました。高校の同級生の演劇部の友達に出演を頼み、日吉キャンパスやSFCで撮ったり、保健室で撮ったり、学生らしく勢いで映画作りをしていきました。

明確に映画監督という仕事を意識したのは、大学2年の夏に参加した映画専門学校ワークショップで、篠原哲雄監督にお会いしたときです。「映画監督って本当にいるんだ。ここに実在するということとは、自分にもチャンスがゼロじゃない」と感じたのです。

また、学生の自主映画といっても、一人では作れません。手伝ってくれるスタッフも俳優も必要です。そこでワークショップで知り合った人たちと「EYE」（アイズ・フィルム）という制作集団を組織し、お互いの映画作りを助け合うことにしたのです。「今回は手伝うから、次回は手伝って」というわけです。

——その頃には、仕事は映画監督と決めていたのですか？

小泉 はい。プロの映画監督になるには、

自主映画で賞をとって注目されるのが近道なのですが、そう甘くはありません。僕も塾生の頃に『文金高島田二丁目』と

いう作品で、東京学生映画祭、水戸短編映像祭や、インディーズムービー・フェスティバルなどで入賞しましたが、監督になることには直接は結びつきませんでした。通常は監督の下で助監督の経験を積み上げて、やがて監督にというルートが一般的です。ワークショップでお会いした篠原監督からは、「助監督として来てもらってもいいけれど、一生に一度の大学新卒なのだから、それを行使してからもいいんじゃないか」と言ってもらい、就職して監督になる道を模索することになりました。

当時、社員として映画監督を抱えている会社は、いま僕が所属しているロボットともう一社ぐらいしかありませんでしたから、それ以外にもテレビ番組やCMの制作会社も受けました。結果、ロボットと広告会社のCM制作部門から内定をいただき、実を言うと広告会社の方に腹は決まっていたのです。

とは言え当時のロボットの社長の阿部秀司さんは、プロデューサーとしても人としても魅力的な方なので、直接お会いして辞退しようと面会を申し込み、辞退



『ちはやふる』撮影時の小泉君（株式会社ロボット提供）

文を手紙にして目の前で読み上げました。生意気というか、困ったやつですよ。そこで「この野郎！」とコーヒーでもかけられるかと覚悟していたら、意外にも引き留められて、いろいろ話をしてくださいました。その寛大さに胸を打たれ、この人の下で働きたいとロボット入社を決めました。ただしその時点での所属は映画部ではなくて、CM制作部でした。ちなみに阿部さんは政治学科の先輩塾員です。

問題意識を育ててくれた 政治学科の授業

——なるほど。就職が決まったところで、少し話を戻して、大学生活のことを聞か

せてください。

小泉 自主映画を撮りながら、学業でもいろいろ学び、日吉も三田も楽しいキャンパスライフでした。政治学科の先生は個性的な方が多く、「なぜ多数決が偉いのか」「なぜ人を殺してはいけないのか」など、普段は考えもしないようなことを掘り起こして考えさせる授業は刺激的で、常識を疑う問題意識を持つことを学び、これは映画を作るうえでも役立っています。

印象に残っている授業の一つに、オーストラリアのアボリジニをテーマにした民俗学の講義があります。彼らは1日3時間働いて、あとは好きなことをして楽しい時間を過ごしているのに、先進国と言われるわれわれは1日8時間、時にはそれ以上働いている。果たして人間としてどっちが豊かなのだろうかとの問いがあり、なるほどと思いました。映画作りという大好きなことを仕事にすれば、日々の大半は楽しい豊かな時間になるだろうと安直に考え、これも映画を仕事にするきっかけになっています。自分の思慮の浅さに呆れますね。結果はむしろ逆で、仕事が生活の大部分を占めることになり、好きなことを仕事にするのも考えものだなと感じています。

——映画の話に戻りますが、『タイヨウの

うた』を監督したのが25歳。でもCM制作部での入社だったと聞きました。

小泉 入社してみると映画部所属になっていました。実はこれには面白い裏話があります。入社を決めて、4月までの間に、シネ研の後輩が、『踊る大捜査線』シリーズの監督でロボットに所属していた本広克行監督のインタビュールをしたのです。そのとき、後輩の誰かが、本広監督に「ロボットに入社が決まっている先輩の小泉は、自主映画の世界では注目された人です」と言ったらいいのです。この話を真に受けた本広監督から阿部社長に伝わり、「あの辞退文を読み上げたやつか」と入社時には映画部所属になっていくというわけです。

——後輩の一言が映画監督への道を早めたわけですね。ところで『タイヨウのうた』をはじめ、これまでの作品は、それぞれテーマは違えど、青春映画として本当に感動と楽しさを伝えてくれました。

小泉 『タイヨウのうた』は作っているときは夢中で、いまでもいい映画なのかどうか、自分ではわからないままです。後悔はしていませんが、未熟さのかたまりのような映画です。

——作った監督はそう思うものかもしれませんが、映像の美しさ、構図の良さ、

若い俳優たちの魅力も十分に引き出されていて、青春映画とはいえ、親世代にも大きな感動を与えてくれます。映画を作るうえで心がけていることを教えてください。

小泉 チームワークと、いいアイデアが出る雰囲気作りを大切にしています。自分の思いを完璧に映像にするというよりも、

カメラマンをはじめとするそれぞれの分野のプロの、それぞれの考え方やイメージをくみ上げて、ベストのパフォーマンスを発揮してもらい、それをまとめるのが監督の仕事かな、と思っています。

——最後に塾生へのメッセージを。

小泉 大学時代は大人の身体を持ちながら、精神的にはギリギリ子供でもいられる逆『名探偵コナン』のような人生で一番自由な時です。皆さんはこれから身を見て知るでしょうが、人生でそんな時間



は二度とやってこない。勉強でも遊びでも、本気でやって、1秒も無駄にしてほしくない。バイトでも旅行でもいいし、本気なら必ず得るものがあります。ちなみに僕の体験したバイトはテレビのカメラアシスタント。ケーブルをさばっていました。下手でダメダメなバイト君でした。それで自分のスタンプ能力は低いと判断し、逆に監督にならなくちゃと思ったわけです。

——本日はありがとうございました。